

# 回復期リハビリテーション病棟での老年看護学実習における学びの検討 —学生の実習レポートの分析を通して—

益満智美<sup>1)</sup>, 久松美佐子<sup>1)</sup>, 野中弘美<sup>1)</sup>, 金子美千代<sup>2)</sup>, 丹羽さよ子<sup>1)</sup>

## 要旨

本研究の目的は、回復期リハビリテーション病棟における老年看護学実習において、学生がどのような学びをしているかを明らかにすることである。回復期リハビリテーション病棟で履修した学生50名の提出したレポートから、実施できた援助に関する記述を抽出し、意味の類似性によりグルーピング化を行い、カテゴリを抽出した。その結果、【対象の人となりに合わせた生活を送れるための援助】【自立性の維持・向上を目指した生活への援助】【自我発達を促進する援助】【家族の思いを理解し受け入れに向けた援助】が抽出された。本実習によって、「生活行動への援助」を通して対象の生活機能およびQOLの向上を図るという、リハビリテーションの視点を持った看護については多くの学生が実施していたが、老年期にある対象の自我発達を支え、家族を含めたチーム全体で対象を支えていくという援助は少なかった。

キーワード：回復期リハビリテーション病棟, 老年看護学実習, 学び, レポート分析

## I. 緒言

老年期になると何らかの健康・生活障害を生じてくる。一方、高齢者は、自らの人生から獲得した独自の知恵で適応し、死の瞬間まで成長し続ける存在である。したがって、老年看護では、健康の回復だけでなく生活における自己実現を促して、最期まで発達し続けることを全人的に支援する必要がある。よって、老年看護では、疾患の治療を中心とした支援ではなく、対象の生き方や望みを把握し“最期までその人らしく生きてもらう”ための支援が求められる。そのためには、我々は、リハビリテーションの視点を持った看護、つまり、「リハビリテーション看護」が重要であると考えており、老年看護学領域の講義科目として「リハビリテーション看護(30時間)」がある。そして、「老年看護学実習Ⅱ」で、回復期リハビリテーション病棟において脳卒中後遺症等により生活障害を有している高齢者を対象とした実習を行っている。

リハビリテーションとは「全人的復権」という意味であり、人間が人間らしく生きることを目指したものである。また、リハビリテーション看護とは、機能回復訓練を通してではなく、看護本来の仕事である“生活援助”を通して、対象の身体機能や形態の障害を最小限にとどめ、二次的障害を予防すると共に、残存機能を最大限に生かしながらその人らしい生活を送れるように支援するものである。

そこで、本研究では、回復期リハビリテーション病棟における老年看護学実習Ⅱにおいて、学生がどのような学びをしているかについて明らかにすることである。

## II. 研究方法

### 1. 対象

1) 看護学専攻4年生のうち老年看護学実習Ⅱを回復期リハビリテーション病棟で履修した学生50名  
回復期リハビリテーション病棟では、脳卒中や運動器

<sup>1)</sup> 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻地域包括看護学講座

<sup>2)</sup> 鹿児島大学医学部保健学科島嶼・地域ナース育成センター

連絡先：益満 智美

鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax: 099-275-6760

E-mail: t-masu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

障害の急性期から脱し、回復期の高齢患者が療養しており医療者はチームで患者の生活の再構築を支えている。

## 2) 対象の学習背景

(1) 老年看護学に関する学習背景：講義としては、老年健康論、老年看護学概論、老年ケア論、リハビリテーション看護の4科目（各30時間）である。その主な講義内容は表1に示す通りである。実習は3年次にグループホームあるいは介護老人保健施設で、認知症高齢者を対象とした「老年看護学実習Ⅰ」（45時間）を行っている。

表1 老年看護における主な講義内容

「老年健康論」2年生前期
・老年期の発達課題
・老年者の身体的・心理的・社会的特徴について
・老年者のQOLについて
・老年者を取り巻く問題
・老年者のケアシステム
「老年看護学概論」2年生後期
・老年看護とは
・老年看護展開において目指すべきこと
・老年期に起こりやすい日常生活の問題について
「老年ケア論」3年生前期
・老年看護に必要な不可欠な臨床的知識・技術について
「リハビリテーション看護」3年生前期
・リハビリテーションでの看護の役割
・リハビリテーション看護に必要な知識・技術

(2) 他領域に関する学習背景：3年次の前期に、「基礎看護学実習」後期に「老年看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習」「小児看護学実習」「母性看護学実習」「精神看護学実習」を修了している。また、看護管理学、家族看護論、卒業研究、および保健師課程の必修科目以外の看護専門教育必修科目は修了している。

## 3) 「老年看護学実習Ⅱ」の展開方法

(1) 4年次の5月～7月までの期間に、回復期リハビリテーション病棟で8日間の実習を行う。回復期リハビリテーション病棟で実習した学生の実習対象となる高齢者は脳卒中後遺症等の疾患や加齢による何らかのADL障害や認知障害をもつ人である。

(2) 学生には、以下の①～②を実習目標とするように指導している。

①対象（高齢者）を全人的に理解し、必要なケアを考えることができる。

a. 対象（高齢者）の言動・訴えに誠実に耳を傾け、対象の立場に立ち、共感的に理解することができる。

b. 対象の言動から、対象が人生や生活で大切にしてきたこと（価値観）、自分の人生や現在の生活に対する思いなどを共感的に理解し、「対象の望む（その人らしい）生活・人生」について考えることができる。

c. 身体的、心理・社会的な視点、生活への影響、など情報を多角的に集め、対象の健康状態について総合的に査定し、「よりよい健康状態・生活像」を説明できる。

d. 「よりよい健康状態・生活像」を考慮しながら、対象の望む生活・人生の実現を目指した看護目標・計画を立案できる。

②対象（高齢者）の望む生活・人生の実現を目指し、必要なケアを適切に展開することができる。

a. 目ざしうる最大限の生活機能を促すことができる。

b. 対象（高齢者）の自我発達を促すことができる。

c. 対象（高齢者）のもつ潜在力（強み）を引き出し、活かすことができる。

d. 対象（高齢者）の安寧に向けて、対象と家族（キーパーソン）の調整ができる。

e. 「住み慣れた場所で最後までその人らしく」を見据えた支援を行うことができる。

f. 修復の結果として死があれば、安寧な死へのプロセスを整えることができる。

g. 地域包括ケアシステムにおける看護の役割と課題について考察できる。

(3) 日々の実習終了前にリフレクションの時間をもち、振り返りや意見交換を行った。実習終了前にはカンファレンスを学生全員と臨床指導者、教員とで行うことで高齢者や老年看護、リハビリテーション看護についての学びを深めるようにしている。

## 2. 方法

### 1) 研究デザイン

質的研究

学生の「援助した内容」の詳細を知るためには量的研究ではなく、1つ1つ体験した内容を詳細に抽出する質的分析を採用した。

### 2) 調査期間

2018年5月7日～2018年7月27日

### 3) 分析データ

実習終了後に提出される、「本実習で看護者としてどのような援助ができたか」という問いに対するレポートの記述内容から「援助した内容」をデータとした。

この研究において「援助した内容」とは患者に必要な援助として判断し、提供したものであり、実習において達成できたものとして判断した。

### 4) 分析方法

分析は質的帰納的に行った。記述内容より、「援助し

表2 リハビリテーション看護実習において実践できた援助内容

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル	データ数	サブカテゴリーデータ数	カテゴリーデータ数	
対象の人となりに合わせた生活が送れるための援助	対象の思いに寄り添い穏やかな生活を送るための援助	患者の思いを受け止める援助	2	10	35	
		患者の気持ちに寄り添う援助	3			
		安心して穏やかに生活できるための援助	4			
		(多職種)チームで話し合い、生活への不安を一緒に考える援助	1			
	安心して日常生活が送れるような援助	ストレスが軽減するための援助	3	4		
		不安が軽減するような援助	1			
	自分らしく生活していけるような援助	自分らしく生活していけるような援助	対象の思いや性格を理解しその人らしさに合わせた援助	6		21
			障害をもちながら自分らしく生活していけるような援助	2		
			これまでの生活や人生を考慮した援助	2		
			他職種間で情報を共有し効果的なリハビリができるような援助	2		
退院後の生活をイメージした援助			9			
自分でしたいという思いを尊重した援助			2			
自立性の維持・向上を目指した生活への援助	持てる力を生活の中で発揮できるような援助	対象のペースの合わせた援助	2	42	103	
		できるADLをしているADLにするための援助	3			
		対象のもっている力を引き出す援助	9			
		生活の中で意欲的に行動できるような援助	2			
		他者との交流を持つことで社会的交流を図る援助	1			
		対象の行動パターンに合わせた援助	3			
		できるところは自分でしてもらう援助	7			
		自ら安全に配慮し行動することができる援助	5			
		必要な援助は何かを見極め、焦点をあてた援助	3			
		患者の強みをリハビリに取り入れた援助	5			
	リハビリに意欲をもってもらい生活にいかす援助	リハビリに前向きになれるような援助	3	37		
		患者の希望を取り入れた援助	1			
		リハビリのモチベーションを維持できるような援助	4			
		できることに目を向けることができるような援助	3			
		リハビリで行っていることと日常生活行動が繋がっていることを意識できる援助	2			
		生活の中に趣味や楽しむことを取り入れたリハビリへの援助	13			
		日常生活行動に満足感を得られるような援助	6			
		日常生活の中にリハビリの要素を取り入れた援助	5			
		食事を楽しめるような援助	2			
		休息(睡眠)と活動を整える援助	8			
生活リズムを整える援助	生活行動を促し生活リズムを整える援助	7	17			
	注意障害や空間無視に対して注意・意識が向くような援助	4				
	認知機能低下に対する援助	1				
疾患や障害を理解した援助	記憶障害に対して活動を把握できるような援助	1	7			
	身体失認に対して注意が向くような援助	1				
	自己肯定感を高める援助	5				
	自己効力感を感じるような関わり	2				
自我発達を促進する援助	自己効力感などの自己肯定感を高める援助	自己効力感を感じるような関わり	2	14		
		自分も人の役にたつことができるという実感をもてる援助	1			
		やりたいことを実現するための援助	1			
	自尊心を尊重した援助	成長を認識できる援助	1		4	
		人として敬い、自尊心を傷つけないような援助	1			
		自尊心を維持できるような援助	1			
		自尊心を高められるような援助	2			
家族の思いを理解し受け入れに向けた援助	家族の思いを理解し在宅向け準備を整える援助	家族の介護受け入れの準備への援助	1	2	2	
	家族への負担・不安への援助	家族への負担・不安への援助	1			

た内容」を抽出し意味内容を損ねないように1つの意味ごとに切片化した。切片化したデータにラベル名をつけた。抽出されたラベルの意味を類似性によりグルーピングし、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

分析の厳密性を高めるために、分析結果を質的研究の経験者3名で検討した。

### 3. 倫理的配慮

本研究に使用したデータは個人が特定されないように匿名化した。

なお、本研究は教育評価であるため、倫理審査の必要がない旨の回答を、本学疫学研究等倫理委員会から得

ている。

## Ⅲ. 結果

### 1. 学生の受持ち患者の内訳

脳血管疾患46名、骨・関節疾患4名であり、全員が生活障害を有していた。

### 2. 記述内容について(表2)

実習終了時に提出された最終レポートの“看護者としてどのような援助ができたか”の記述内容から、援助に関する記述(データ)を抽出した。その結果、全体で154データが抽出された。また、これらの意味の類似性

によりカテゴリ化した結果、4つのカテゴリに分類された。表2に各カテゴリと記述件数を示す。以下、カテゴリは【】、サブカテゴリは《》，ラベルは〈〉で示す。

#### 1) 【自立性の維持・向上を目指した生活への援助】

学生は、生活の場で、《疾患や障害を理解した援助》(7データ)、《持てる力を生活の中で発揮できるような関わり》(42データ)、《リハビリに意欲をもってもらい生活にいかす援助》(37データ)を行っていた。さらに、《生活リズムを整える援助》(17データ)につなげていた。学生は生活そのものが自立への訓練になることを意識していたといえる。その人にとって、その行動がどのような意味を持っているのかを理解し、それに沿って援助することの重要性を理解できていた。

#### 2) 【対象の人となりに合わせた生活が送れるための援助】

学生は、《自分らしく生活していけるような援助》(21データ)を行い、《安心して日常生活が送れるような援助》(4データ)や《対象の思いに寄り添い、穏やかな生活を送るための援助》(10データ)を行っていた。学生は、講義の中で学んでいるその人らしさを理解する重要性を学んでいた。

#### 3) 【自我発達を促進する援助】

学生は、《自己効力感などの自己肯定感を高める援助》(7データ)、《自己の成長や役割への意識を高める援助》(3データ)、《自尊心を尊重した援助》(4データ)を行っていた。学生は、主体性を尊重することで対象の自尊心を保つことができること、また、「人は生涯を通して発達し続ける」という生涯発達を基本にしている老年看護学の考えの重要性を理解できていた。

#### 4) 【家族の思いを理解し受け入れに向けた援助】

このカテゴリでは、《家族の思いを理解し、在宅へ向け準備を整えることができる援助》(1データ)、《家族への負担・不安への援助》(1データ)を行っていた。学生は、医療者から家族の思いや状況を把握しており、家族への援助は重要なものであることを理解できていた。

### 3. 各カテゴリに含まれるデータ数について

抽出されたデータ数は全部で154データ抽出され、カテゴリ数は4つであった。カテゴリのデータ数の割合を見てみると、【自立性の維持・向上を目指した生活への援助】103データ(全データに占める割合66.9%、以下同様)、【対象の人となりに合わせた生活が送れるための

援助】35データ(22.7%)、【自我発達を促進する援助】14データ(9.1%)、【家族の思いを理解し受け入れに向けた援助】2データ(1.3%)であった。

## IV. 考察

### 1. 実習の学びの検討

脳卒中などにより障害を負う体験は、心理的に「今までの自己を否定する」体験となり、様々な葛藤を生じる。これは“前向きに生きる”ことを阻害する。野口は、老年看護の対象者である高齢者が、加齢に伴う身体機能の変化や役割の変化、環境の変化を自覚し、それを受け入れつつ、セルフケアを行ったり、支援を受けたりしながら主体的に生活をしていくためには、自分自身であり続け、一貫した自己を創造できること、つまり変わらないものとしての自分らしさを追及できるようなケアが必要である<sup>1)</sup>と述べている。今回、学生が行った、《対象の思いに寄り添い穏やかな生活を送るための援助》《安心して日常生活が送れるような援助》《自分らしく生活していけるような援助》などの【対象の人となりに合わせた生活が送れるための援助】は、高齢者に自身の身体機能や役割の変化という障害の受容を促し、現在および今後の生活や生きることを前向きにするために非常に重要な援助であると言える。このカテゴリは実習目標の①a-dに相当するため、実習目標に沿った学びができていたと考える。

次に、今回、学生が実施した《持てる力を生活の中で発揮できるような関わり》や《リハビリに意欲をもってもらい生活にいかす援助》などの【自立性の維持・向上を目指した生活への援助】は、学生の記述数としても全データの7割近くを占めていた。このカテゴリは実習目標②a,c,eに相当するため、実習目標に沿った学びができていたと考える。回復期は、日常生活動作の自立の途上であり、できる動作とできない動作が混在している時期である<sup>2)</sup>。高齢者を対象としたリハビリテーション看護において、一律に自立や回復を目標にするのではなく、その人にとって、その行動がどのような意味を持っているのかを理解し、それに沿って援助することが必要であり、そのような援助がなされることで高齢者の身体機能も維持・向上できるとされている<sup>3)</sup>。また、大川<sup>4)</sup>は、ADL訓練などの活動向上訓練には即効的な効果があり、心身機能が回復しなくとも短期間で自立度が大きく向上し、落ちかかった生活機能を元の状態に戻すことができ、さらにより状態にすることさえできると述べている。つまり、リハビリテーションにおける看護の独自性は、身体機能の向上に焦点をあてた援助ではなく、対象の生活機能およびQOLの向上を目的とし、それも「機能回復訓練」ではなく「その人にとって必要な生活行動

への援助」を通して対象の生活機能および QOL の向上を図るところにある。したがって、我々が本実習の学習目的とした、リハビリテーションの視点を持った看護の重要性を多くの学生に理解してもらえたものと考ええる。

さらに、石鍋は、患者自身が主役であることを認めて主体性を大切にする態度は“自己決定”の尊重に通じる<sup>5)</sup>と述べている。さまざまな衰退や喪失を体験し、他者に依存せざるを得ない高齢者は、それだけで自我が脅威にさらされて自尊感情を低下しやすい。老年看護では、健康の回復だけでなく生活における自己実現を促して、最期まで発達し続けることを全人的に支援する必要があるが、自己発達を遂げるためには、それまでに獲得してきた肯定的自己概念を維持できることが大切である<sup>6)</sup>。今回、学生は【自立性の維持・向上を目指した生活への援助】を行うときに、《自己効力感などの自己肯定感を高める援助》《自己の成長や役割への意識を高める援助》《自尊心を尊重した援助》という【自己発達を促進する援助】を行っていた。このカテゴリは実習目標②bに相当するため、実習目標に沿った学びができていたと考える。しかし、【自己発達を促進する援助】は、他のカテゴリに比べてデータ数が少なく、学生にとってこれらに目を向けて意識して考えることが十分でなかったと考えられる。

【家族の思いを理解し受け入れに向けた援助】は他の4つのカテゴリを行う上で家族の介護力を把握し、対象の目指すゴールを家族と共に考えていくために必要である。今回、学生は、家族の在宅への受け入れの意思決定や在宅復帰の阻害要因に繋がらないように、《家族への負担・不安への援助》を行い、対象の望む生活の再構築をしていくうえで《家族の思いを理解し、在宅へ向け準備を整える援助》が重要になることを実感していた。このカテゴリは実習目標②d,e,gに相当するため、実習目標に沿った学びができていたと考える。しかし、データ数としては少なかった。これは、8日間という限られた期間での実習であり、対象の家族と接する機会が少なかったことが大きく影響していた可能性がある。医療者から家族の思いや状況を把握していても、実際に家族への援助として実施することが難しい状況があったと考えられる。

一方、対象の生活の再構築を支えていくために、多職種との連携・協働は欠かせないものであるが、今回、具体的な援助として記述はあったが、データ数としては少なかった。本実習のなかで病棟でのチームカンファレンスへの参加はしていたものの、学生自身が発言する機会が少なかったこともあり、多職種との連携・協働をしているという意識があまりもてなかったのではないかと考える。

## 2. 本実習における今後の課題

学生は、生活障害のある高齢患者に【自立性の維持・向上を目指した生活への援助】、【対象の人となりに合わせた生活を送れるための援助】、【自己発達を促進する援助】、【家族の思いを理解し受け入れに向けた援助】を行っていた。本実習によって、「生活行動への援助」を通して対象の生活機能および QOL の向上を図るという、我々が本実習における学習目的としたリハビリテーションの視点を持った看護については多くの学生が実施していたが、【自己発達を促進する援助】、【家族の思いを理解し受け入れに向けた援助】や〈多職種とのチームアプローチ〉は、データ数が少なかった。老年看護では、自己実現を促して、最期まで発達し続けることを全人的に支援すること、さらに、老年期にある対象の自己発達を支え、複雑である特性をふまえた看護支援を行っていくには、家族を含めたチーム全体で対象を支えていくことが重要である。これらを意識して実習指導を行っていく必要があると考える。

## 文献

- 1) 野口美和子：老年看護学再考—自己発達の観点から—。Quality Nursing vol. 3 no. 10, 1997.
- 2) 中西純子，石川ふみよ編集：リハビリテーション看護論。第2版，p 63, 2008, ヌーヴェルヒロカワ
- 3) 湯浅美千代：リハビリテーションを行う老人への援助の考え方の転換，Quality Nursing vol. 3 no. 10, 1997.
- 4) 大川弥生，工藤美奈子，中村茂美：廃用症候群（生活不活発病）の予防・改善—生活機能向上の観点から—。臨床スポーツ医学。Vol. 25. No. 9 (2008-9)
- 5) 石鍋圭子：セルフケア実践のプロセスと看護。リハビリテーション看護研究2002；5：24-28.
- 6) 小野幸子：老年者の自己発達を促す看護援助。Quality Nursing vol. 3 no. 10, 1997.

# Learning from geriatric nursing training on a convalescent rehabilitation ward: An Analysis of Their Reports

Tomomi Masumitsu<sup>1)</sup>, Misako Hisamatsu<sup>1)</sup>, Hiromi Nonaka<sup>1)</sup>, Michiyo Kaneko<sup>2)</sup>, Sayoko Niwa<sup>1)</sup>

1) Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences, Department of Nursing, Comprehensive Community-based Nursing, Sakuragaoka 8-35-1, Kagoshima, 890-8544 Japan

2) Kagoshima University Faculty of Medicine Education Center for Nurses on Remote Islands and in Remote Areas

Address correspondence to Tomomi Masumitsu

E-mail: t-masu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

## Abstract

The present study involved nursing students who had undergone geriatric nursing training on a convalescent rehabilitation ward, and examined what they had learned from it. The subjects were 50 students who had undergone “Rehabilitation nursing training” on the hospital ward for convalescent rehabilitation, and they were asked to describe “care services that they were able to provide as nurses”. Descriptions related to care were extracted and grouped into the following categories according to the similarities of their meanings: [specific care provided for individual patients based on their personalities to help them live a desired life], [care to maintain and improve the independence of patients], [care to promote patients’ personal development], and [care to help patients understand and accept the feelings of their families]. Whereas many nursing students provided nursing care from the viewpoint of rehabilitation to improve the vital functions and QOL of patients by supporting their daily activities during the training session, few students made efforts to support elderly patients and the development of their egos as a team including their families.

**Keywords:** Convalescent rehabilitation ward, Geriatric nursing training, learning, report analysis